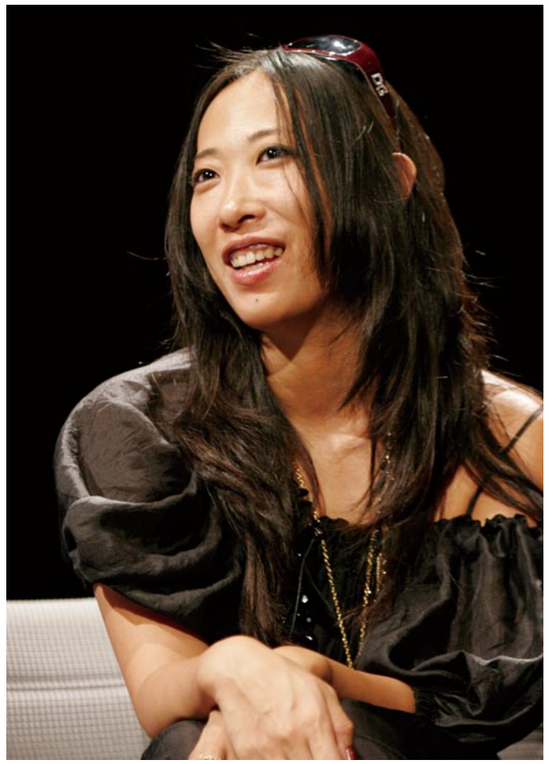
蜷川実花として認識してもらおうと、5歳ぐらいから焦っていたのがよかった。



蜷川実花　Mika Ninagawa

1972年東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。「第9回写真3.3㎡展」グランプリ（96年）、「第13回キャノン写真新世界」優秀賞（96年）、「第9回コニカ写真奨励賞」（98年）、「第26回木村伊兵衛写真賞」（01年）、「大原美術館賞」（06年）など数々の賞を受賞。主な写真集に『Acid Bloom』（03年）『Liquid Dreams』（03年）『mika』（04年）『floating yesterday』（05年）など。現在は様々なファッション誌や、CDジャケット、広告を中心に、写真集や展覧会での作品発表で活躍中。初の長編監督映画『さくらん』が来年2月、公開予定。写真集『永遠の花』（小学館）発売中。トーキョー ワンダーサイト 渋谷（開催中～11月26日）、小山登美夫ギャラリー（11月17日～12月9日）にて個展同時開催。http://ninamika.com（PC）　http://ninamika-m.com（モバイル）

N　俺はないなあ。はずかしくて。僕はラブシーンはカメラを引いてワンカットで撮ってしまいます。

S　実花さんは今回が演技をつけるのは初めてで、それを自分が出来てしまうというのは、門前の小僧なのでしょうか。

MN　やる前は本当に出来るか一番不安な所でしたが、みんなにはすごく出来ていたと言われました。出来ていたとしたら何でかなと思いましたが、例えばすごくおいしいご飯を毎日小さい頃から食べていた子だとして、トマトの本当の味はこれだ。塩はこれとこれは違う。お醤油だったらこれがある。それを組み合わせるとこうなるという経験値があって大人になったとして、その子がお料理を作る事は出来なくても、出てきたお料理に対して「ちょっと塩味が濃くない？」という、ある味の基準値は持っているのではないかと思います。私は父の舞台を観ていないのがたぶん2、3本というぐらい、小さい頃から本当によく観ているので、もしかしたら子供の時から、こういうものがいいものなのだという、演技に対する基準値が身についているのかなと思います。

これだけやっている人が身内にいると驕ることが絶対に出来ない

S　蜷川さんは来年上演する予定の舞台は11本ですね。とんでもないですよね。

MN　11本もやるというのに来年で72歳でしょう。私も忙しいけれど、「忙しくて偉いね」「すごくやっていて偉いね」とか、いろいろと言われても、これだけやっている人が身内にいると驕ることが絶対に出来ないのです。「私ってすごいんだ」とか、自分の実力以上に勘違いしたりとか、みんなにちやほやされていい気になりようがないのです。それはすご～く重要で、そこが絶対にぶれないというのが一番大きな財産かなと思っています。

N　そんなことを考えているんだ。初めて知ったよ。

S　照れていますね。お父様、お母様の名前が知られているというと、どうしても親の七光りがどうとかがでてきて、反発するし、気にしないというフリをするのも不自然だし、とすごく大変だと思いますが、そこがニュートラルにこれたというのはなぜでしょう。

MN　「蜷川幸雄の娘」ではなく、蜷川実花として認識してもらうにはどうしたらいいのだろうと、たぶん5歳ぐらいから焦っていたんですが、それがかえってすごくよくて、焦るというのはすごく重要な事だと思います。それは私の中で大事なキーワードです。焦るからこそ早く、私だったら写真に出会えたり、蜷川実花とは何なのだろう、蜷川実花として認識してもらうのにはどうしたら、というように、人よりは多くのプレッシャーがかかっていたことは、それはすごくラッキーだと思います。

私は女だからかな。男の子だったらいろいろな反発があったのかも知れないですね。

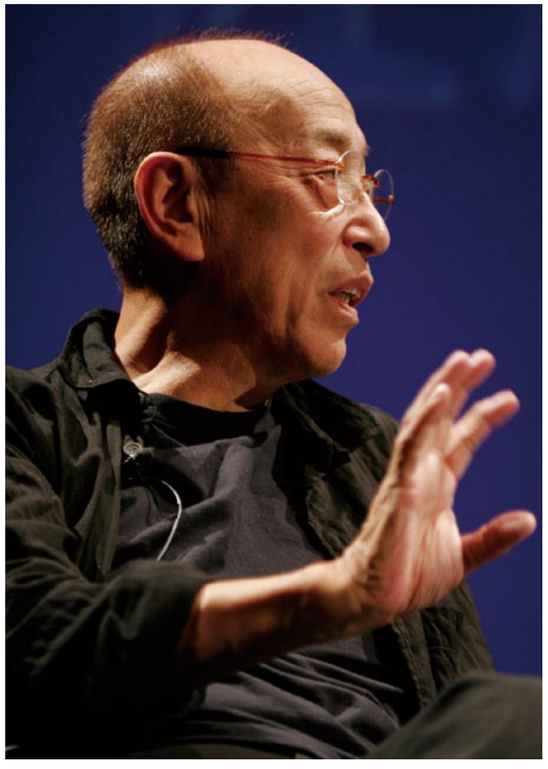
N　この世界では知名度がある父親を持っていてプラスになることはないし、それでチャンスが来ることも絶対ないし、マイナスの要素の方がはるかに多いと思います。娘には何の手助けもしなかったし、周辺に父親の影を感じさせないように気をつけていました。勝手に自分で応募して、勝手に写真家になったのです。私は娘が、好きなものを自分で見つけて本当によかったなあと思います。

思えば、小さい時に散歩に行って彼女が写真などを撮っていると、「何であいつはそんな所を撮っているのだろう」というような感じでした。花にばかり寄っていたり、よく雑草みたいなものを撮ったりしていましたが、もっとあっちを撮ればいいのになあとか、変な所を撮るんだなあと思っていましたが、作品が上がって見ると「ああ、そうなのか。人によって景色の中で選ぶものがこんなに違うんだ。これは僕の何かを押しつけたりはしない方がいいのだな」と思ったので、写真のことについては一切口出しはしていないと思います。娘に「どう？」と聞かれれば、「いいねえ」ぐらいで、その他の感想はほとんど言ってないと思います。

S　そのお父様の態度はいまにして思うと助かりましたか。

MN　多分必要以上に自意識がお互いあって、私の展覧会の初日も未だに絶対来ないですし、仲はいいのですが、二人でここにいる（公開対談している）こと自体が不思議です。ここは父にとって大事な聖域だと思うのです。生まれて初めて父親の稽古場に行ったのは、私が32歳の時で、それまでそこは絶対的聖域で入れない所だと思っていました。完璧に一人前になったらいつかは見に行きたいと思っていた所ですが、その時は丁度映画をやるのが決まって、父は一体どんなふうに演技をつけるのだろうと思って行きましたが、すごく怖くて、その意味では参考になりませんでした。32歳になるまで足を踏み入れられなかった境界線が、家族だからより強くあると思うのです。だからたぶん父も私の写真に関しては本当に「いいね」とか、私もお芝居を観て「面白かった」しか言わないんだと思います。

娘が好きなものを自分で見つけて本当によかった。



蜷川幸雄　Yukio Ninagawa

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年も『近代能楽集』ニューヨーク公演、歌舞伎『NINAGAWA十二夜』、『メディア』、『天保十二年のシェイクスピア』など多数の演出を手がける。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

自分に対する厳しさが、クリエーター同士の共通点

S　こうなってくると11本を1本1本全力投するしかないですね。

N　大丈夫なんですかね。才能が音を立てて消えるのです。「ああ、だめだあ。失敗した」というのがあるのです。演出家は俳優に質問されたらとりあえず何でも答えなければいけないと思いますが、僕は立ち往生したら演出を辞めようと決めています。説得力のある言葉でその場をしのげなかったり、イメージが出せなかったりしたら、チームが崩壊します。来年いっぱいはメチャクチャやっちゃおうと思っているから、今はだからいいのです。カキカキと目が覚めています。

S　音を立てて崩れていくというのは、どんな音だと思いますか。

N　最近の仕事も自分でも「ああぁ！あそこは何にもやっていないな」と思ったので、それは危機感があります。だから（9月にシアターコクーンで上演した）『オレステス』はどんな劇評があろうと誰が何と言おうと、世界のトップクラスの仕事をしていると僕は自分で思っています。それはどう考えるかというと、ウェストエンドやブロードウェイ、イギリスだったらナショナル・シアターでもいいが、世界の第一線で仕事をしている演出家達の作品が並ぶ劇場に自分の作品を入れてみる。そして反対側の歩道橋からそれを眺め、看板を見、中に入り、出てきて、それの一番いいものと比べた時に「ああ、大丈夫だな」と思っています。

S　お父様の話を聞いていて、もちろん作っているものは違いますが、同じクリエーターとしてやはりそういう苦労とかはどうですか。

MN　本当に深く頷けるというか、私は、自分のことを一番厳しく、一番低い点数をつけられる自分になりたいと思いますし、出来るだけ俯瞰で自分のことを見たいし、同時に一番自分を信じ、褒めるのも自分でいたいし、絶対的な自信と一番「ここ、ちょっとほこりがあるんじゃないの」と見れられるぐらいの、両極が欲しいのです。真ん中は全然いらないです。両方が欲しくて、その両方がチェックできていればいいなあと思ってやっています。舞台よりも、1回1回の撮影が短いので、すごくチェックすることが多いのです。一つでも「この間やったこととちょっと似ていることをやってしまったな」と周りが気づいていなくても自分で気づくことがあるので。今、気づきましたが、こういう気質は父からきているのだなあとすごく思いながら聞いていました。

S　今日は親子の間でも初めて知ったこともたくさんあって、とても刺激的でした。ありがとうございました。

2006.9.22　彩の国さいたま芸術劇場 小ホールにて